

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720229
 研究課題名 (和文) オーストラリアにおけるアジア系留学生の急増と都市グローバル化へのインパクト
 研究課題名 (英文) The rapid increase of Asian international students in Australia -Focusing on their impact on the city's globalization-
 研究代表者
 堤 純 (TSUTSUMI JUN)
 愛媛大学・法文学部・准教授
 研究者番号：90281766

研究成果の概要：本研究は、主としてオーストラリアのシドニーとメルボルンを対象に、全大学生定員の約 25% にまで急拡大した留学生 (大半はアジア出身者) に着目して、都心部を中心にみられる高層・高級住宅の急増との関連を考察した。留学生の急増は大都市圏の人口増加にも大きく寄与しており、関連する商業やサービス業等の雇用へも好影響を与えている。ただ、この現象は従来のグローバル化と都市発展の議論とは異なる性格であることがわかった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	270,000	3,070,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：地域性、オーストラリアの都市構造、オーストラリア、GIS、都市、留学生、グローバル化

1. 研究開始当初の背景

本研究は、主としてメルボルンとシドニーを事例として都市グローバル化の新傾向を考察するものである。従来の都市グローバル化の議論で見ればオーストラリアの首位都市はシドニーである。しかし、近年の留学生の急増と都心部へのインパクトを考えると、メルボルンはシドニーをはるかに凌ぐ世界的な首位都市といえる。都心部における住宅需要、小売・飲食機能の急増などに顕著にみられるインパクトに着目して、従来の都市グローバル化の議論にはなかった領域に踏み込んで分析する点に本研究の特色がある。従来の議論の枠組みでは下位にランクさ

れる都市であっても、海外直接投資の効果や本研究で着目する留学生の急増などのインパクトにより、都市グローバル化の効用を従来の理解よりもはるかに多く受けていることが予想される。

2. 研究の目的

アジアの途上国から高次の専門教育機会を求めてオーストラリアの大学や大学院に進学する留学生の急増、および彼らが都市グローバル化にもたらす各種のインパクトに焦点を当てた。

従来の製造業や金融に代表される事業所サービス業の集積の調査のみならず、留学生

の急増過程の調査を通して、いかなるインパクトが都市のグローバル化を推進するのか、さらにそのための社会・経済条件、地域的条件は何かを明らかにすることが目的である。

3. 研究の方法

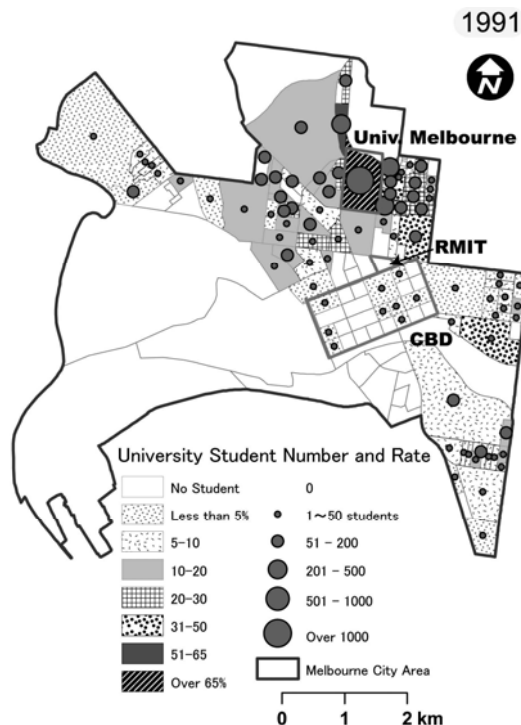
本研究は現地調査を基本とした。したがって、研究期間の3年間にわたり、毎年1次調査と2次調査を実施した。毎年、1次調査で持ち帰ったデータや資料を日本で分析し、その分析結果を踏まえて2次調査を実施した。

また、本研究を進めるにあたり、GIS（地理情報システム）を積極的に用いた。オーストラリア移民局、統計局、州政府、市当局、大学当局における資料収集を進め、収集したデータはすべてGISソフトウェア上にて空間データベースとして蓄積・管理した。このデータベースをもとに各種の地図（主題図）を作成し、地域性を検討した。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

本研究は、主としてオーストラリアのメルボルンとシドニーを対象に、全大学生定員の約25%にまで急拡大した留学生（大半はアジア出身者）に着目して、彼らが作り出す「在学期間中のみ」という特殊な賃貸借需要という視点から、都心部を中心にみられる高層・高級住宅の急増との関連を考察した。

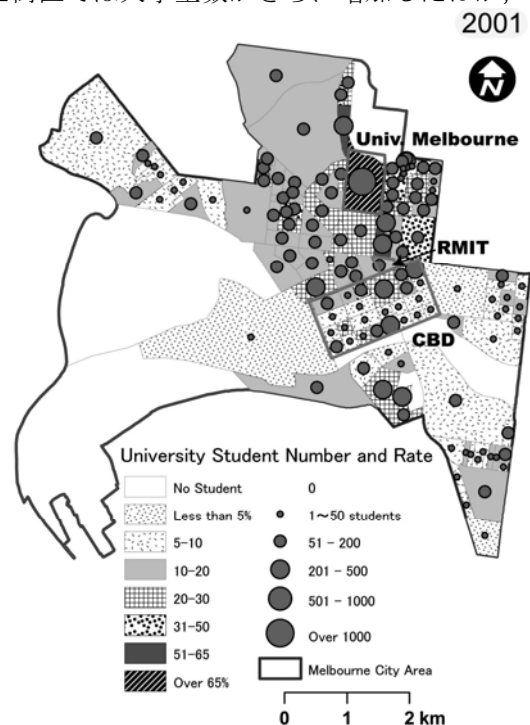


Data source: ABS Census BCP Data at CD level in 1991, 2001.

図1 メルボルン市の大学生数（1991年）

図1は1991年のメルボルン市における大学生の分布を示したものである。図中に太枠で示した部分がメルボルン市のCBDの範囲である。CBDの北に隣接してメルボルン工科大学（RMIT）が立地し、さらにその北側にはメルボルン大学が立地する。両大学ともメルボルン市内を縦横に走るトラム網でCBDや主要な郊外鉄道駅と結ばれており、公共交通を利用した通学の便は良好である。1991年の大学生の分布をみると、主として上記2大学の周辺に集まって居住しており、大学生の多い街区は全居住者に占める大学生の割合も高いことがみてとれる。1991年にCBD内部に居住する大学生は97人にすぎず、サウスバンクやドックランズに住む大学生は皆無であった。1991年の時点ではメルボルン市内に居住する大学生数は5,857人であり、その殆どがメルボルン大学とメルボルン工科大学の近くに住んでいたことがわかる。1991年のメルボルン市の総人口は40,135人であり、総人口に占める大学生の割合は14.6%であった。

メルボルン市内に居住する大学生は、2001年にかけて急増した。2001年の状況を示した図2によれば、大学生の急増の様子が顕著に表れている。大学生の居住地は両大学の周辺にとどまらず、CBD、サウスバンク、ドックランズを含めたメルボルン市内の全域に拡大した。2001年以前に大学生が住んでいた街区では大学生数がさらに増加したほか、



Data source: ABS Census BCP Data at CD level in 1991, 2001.

図2 メルボルン市の大学生数（2001年）

これまで大学生の住んでいなかった街区においても大学生が大幅に増加したことがわかる。2001年にCBDに居住していた大学生は2,059人へと急増した。この傾向はメルボルン市の全域でみられ、市内の大学生数は12,707人にまで拡大した。2001年のメルボルン市の総人口67,780人に占める大学生の割合は18.7%となった。

次に、メルボルン市における全大学生に占める留学生の割合を把握するため、オーストラリア統計局のデータの中から、海外生まれの大学生数を留学生数として分析を進めた。このデータによれば、メルボルン市における留学生の割合は、1991年には全大学生の30.2%であったが、1996年には42.6%、そして2001年には57.3%へと大幅に拡大した。データの制約から、どの地区で留学生の割合が急拡大しているかの特定はできないが、図1と図2と関連させながら総合的にみることにより、メルボルン市において大学生が急増していること、また、その主要因が海外生まれの留学生の増加であることがみてとれる。

1990年代以降にメルボルン市でみられた高層住宅開発は、当初は、子育て終了後の比較的裕福な中高年層を主な入居者と想定したものであった。その後の高層住宅開発の拡大は、オーストラリア国内の好景気も後押しして投機ブームが起きたことによる。こうした投機目的によって購入された高層住宅の多くは、不動産賃貸実務を請け負う会社を通じて、賃貸用として利用されている。CBDを中心としたメルボルン市における高層住宅の居住者は、従来の研究で指摘されるような若年高所得者や裕福な中高年層に限らず、3、4人で共同生活（ルームシェア）を送る留学生が大きな割合を占める。すなわち、これらの住宅にとっては、潜在的な需要の発生源としての留学生の存在が重要である。この背景には、1980年代半ば以降、オーストラリア国内における、留学生関連の教育政策の急激な変化が挙げられる。その結果、留学生数は増大し、さらに国費留学生中心から、自ら学費を払う留学生中心へと大きく方針転換された。急増した留学生はメルボルン市の人口増加にも大きく寄与しており、関連する商業やサービス業などの雇用へも好影響を与えていると考えられる。そして、留学生の受入れはグローバルマーケットへの教育サービスの輸出という側面をもち、オーストラリアの都市成長を牽引するほどのインパクトをもつことが示唆された。こうした変化は、従来のグローバル化と都市発展の議論とは異なる性格のものであることがわかった。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究で明らかになった点は、上記(1)

の項のようにまとめられる。下記の発表論文等の欄に記載する業績(成果)に示す通り、3点の査読付き論文を作成することができた(業績欄の①、④、⑤)。この点で、地理学の研究業績として学界に貢献できたと考えられる。また、本研究の成果は、日本国内のみならず、研究対象としたオーストラリア国内の学術雑誌に複数の論文が掲載されたことも特筆すべきことである。GISに関わる学術誌として世界中に公開されているMonash ePress Applied GIS誌に掲載された論文は、当該誌のアクセスランキングでもトップ20に入る程の引用回数を数えており、オーストラリア国内においてもインパクトがあったと評価できる。

(3) 今後の展望

本研究で得られた知見は、従来の研究にみられる「ジェントリフィケーション」の枠組から得られる知見との共通点もみられた。一方で、「大都市」、「若年高所得」、「世界都市」等をキー・ワードとする研究例とは一線を画す議論を含んでいることも指摘できる。メルボルンやシドニーの都心部には、いわゆるニュー・エコノミーとよばれる金融・保険、IT、メディア等の産業に従事する若年高所得層が増加し、彼らが作り出す都心居住のライフスタイルへの需要は、オフィスビルばかりが占拠していた大都市の都心を確実に変貌させ、コンド・ブーム(Condo Boom:高層・高級住宅の急増)を生み出してきた。

メルボルンやシドニーの都心部におけるコンド・ブームの進展につれ、こうした高層・高級住宅の賃貸借事情の「変質」が浮き彫りになってきた。両都市の都心部という高地価地区でみられるコンド・ブームは、当初は若年高所得層や子育て終了後の比較的裕福な中高年層(empty nesters)からの需要をターゲットとした供給であったが、その後の海外出身の留学生の急増に呼応して、在学期間中に限って数年単位で賃借する留学生を潜在的な需要発生源(possible occupants)としてとらえ、彼らの需要を強く意識した供給へと変質していることがわかってきた。こうした議論は、これまでのジェントリフィケーションの研究の延長上にあるといえるが、こうしたジェントリフィケーションの多様化に関する考察は重要であるにもかかわらず、実際にはほとんど実態が解明されていない。

本研究に続く新たな課題として、都市内部の構造変容を理解するには、コンド・ブームの需要と供給メカニズムに関して周到に研究を進める必要があるといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

① 堤 純, オコナー・ケヴィン 2008. 留学生の急増からみたメルボルン市の変容. 人文地理, 60 巻, 323-340. 【査読有】

② 堤 純 2008. シドニー大都市圏におけるアジア系留学生の急増. 日本地理学会発表要旨集, 74 巻, 58-58. 【査読なし】

③ Tsutsumi, Jun and O'Connor, Kevin 2007. International students and the changing character of the Melbourne CBD. The Association of American Geographers 2007 Annual Meeting Program, 152-152. 【査読なし】

④ Tsutsumi, Jun and Wyatt, Ray 2006. Editorial: A brief history of metropolitan planning in Melbourne, Australia. Applied GIS 2 (2). 7.1-7.10. 【査読有】

⑤ Tsutsumi, Jun and O'Connor, Kevin 2006. Time series analysis of the skyline and employment changes in the CBD of Melbourne. Applied GIS, 2 (2). 8.1-8.12. 【査読有】

④および⑤の電子ジャーナル URL
<http://publications.epress.monash.edu/toc/ag/2006/2/2>

〔学会発表〕(計 3 件)

① 堤 純 シドニー大都市圏におけるアジア系留学生の急増. 日本地理学会秋季学術大会 (2008 年 10 月 4 日, 岩手大学)

② 堤 純 メルボルン都心部における居住機能の急増——GIS (地理情報システム) によるセンサスデータの分析——.
オーストラリア学会第 18 回全国研究大会 (2007 年 6 月 10 日, 国立民族学博物館)

③ Tsutsumi, Jun and O'Connor, Kevin
International Students and the Changing Character of the Melbourne CBD.
AAG (Association of American Geographers)
2007 Annual Meeting (Session Number 1456:
The restructuring of urban space, higher education and (post)students).
San Francisco, USA, April 17, 2007 (Hotel Hilton San Francisco).

6. 研究組織
(1) 研究代表者

堤 純 (TSUTSUMI JUN)
愛媛大学・法文学部・准教授
研究者番号: 90281766

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし